7 各学校における分析とその活用例について

1 児童生徒一人一人の「学力のレベルと学力の伸び」の可視化

各学校に配付されている「帳票４０」には、以下のとおり前年度調査の学力のレベルとの比較により、「昨年度からの学力の伸び」が数値として示されています。

40 学校用

令和6年度ふくしま学力調査（小学校6年生）

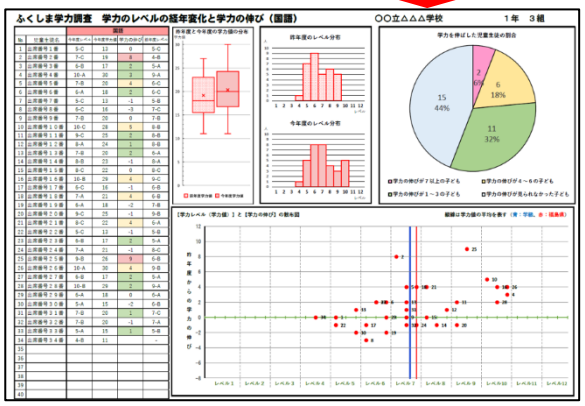
学力分析データ(学力のレベル・伸び・学習方略・非認知)児童生徒別

○○○立△△小学校

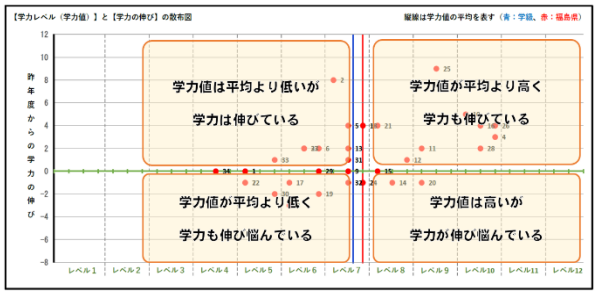
本帳票の「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方略」「非認知能力」の数値の範囲は、1.0～5.0となっています。
数値が**高い**ほど、よい値となっています。
「昨年度からの学力の伸び」がマイナスの場合は、赤字で表記しています。

					R5在籍情報					R6在籍情報					国語			算数・数学		
															R6レベル	昨年度からの学力の伸び	R5レベル	R6レベル	昨年度からの学力の伸び	R5レベル
															学級平均	8-B			8-A		
															学校平均	8-B	0	8-B	8-B	5	6-A
															市町村平均	7-B	0	7-B	6-A	1	6-B
年度		市町村教育委員会名	学校コード	学校名	個人番号	学年	組		性別	個人番号	学年	組		性別	福島県平均					
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****421	5	1	－	1	****421	6	1	－	1	9-C	8	6-B	6-A	9	3-A
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****422	5	1	－	1	****422	6	1	－	1	7-B	3	6-B	8-B	6	6-B
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****423	5	1	－	1	****423	6	1	－	1	8-B	5	6-A	3-B	-2	4-C
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****424	5	1	－	1	****424	6	1	－	1	7-B	6	5-B	7-B	5	5-A
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****425	5	1	－	1	****425	6	1	－	1	9-B	3	8-B	7-B	3	6-B
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****426	5	1	－	2	****426	6	1	－	2	7-A	7	5-B	6-A	1	6-B
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****427	5	1	－	1	****427	6	1	－	1	6-C	4	4-A	3-C	0	3-C
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****428	5	1	－	1	****428	6	1	－	1	9-A	7	7-B	7-C	-3	8-C
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****429	5	1	－	1	****429	6	1	－	1	4-C	0	4-C	3-C	-1	3-B
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○立△△小学校	****430	5	1	－	2	****430	6	1	－	2	6-C	-1	6-B	5-C	2	4-B

本調査の特長の一つである「学力の伸び」から、児童生徒たちのどのような姿が見えてくるのか、数値だけでは見えにくいのではと考え、「学力のレベルと学力の伸び」を可視化する「グラフ化ツール」を作成し、県内全ての小・中学校、義務教育学校、県立特別支援学校小学部・中学部及び、市町村教育委員会へ配付しました。また、「グラフ化ツール」の使い方及び活用事例についてオンライン説明会を実施しました。



右の散布図のグラフは、「グラフ化ツール」によって作成された小学校６学年のグラフの例で、児童生徒一人一人の「学力のレベル」を横軸に、「昨年度からの学力の伸び」を縦軸として表しており、４つのエリアに分けて児童生徒の状態を見ることが可能となります。



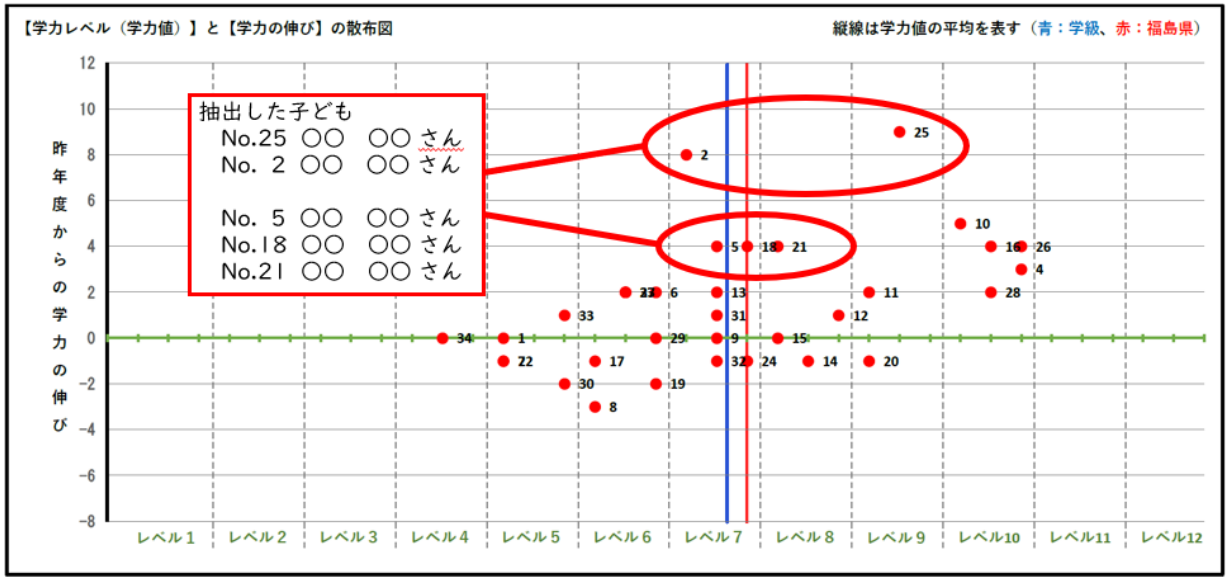
分析をする視点として、例えば、右下のエリアに位置する児童生徒は、一見すると学力値が高いので教師も安心して見てしまいがちですが、昨年と比べると学力が伸び悩んでいるため、支援が必要と考えられます。また、左上のエリアに位置する児童生徒は、学力値は平均に届いていないものの、昨年に比べると学力を伸ばしていることが分かるため、学力の伸びを称賛すべき対象と捉えることができます。このように、単に「学力が高い・低い」だけの分析にとどまらず、「昨年に比べて学力が伸びた・伸び悩んだ」という視点でも分析することができるのが、ふくしま学力調査の強みとなっています。

2　学校での分析について

グラフ化ツールを基に、児童生徒一人一人に寄り添い、称賛したり、励ましたりすることはもちろんですが、これらの結果を授業改善にいかすことが大切です。単に結果を見て、学力の状況を把握するだけでなく、学力が大きく伸びている児童生徒を、校内研究授業における抽出対象とし、事後研究会で学習への取組状況等を共有したり、伸び悩んでいる児童生徒に対する個別支援の方法を検討したりすることが考えられます。

また、国語、算数・数学の教科指導面からだけではなく、クラスや、部活動での人間関係、他教科の授業中の態度、宿題への取組、行事での活躍、家庭環境や兄弟姉妹の状態、前年度からの変化など、その児童生徒にまつわるさまざまな側面から、抽出した児童生徒の学力が伸びた諸要因について、実践感覚から推測していくことが大切です。

例えば、下の散布図からは、上位層や中位層に学力の伸びが見られた児童生徒がいることが分かります。この学級を指導していた先生の取組を互見授業等により共有することで、学校全体の授業改善につなげていくことが重要です。また、児童生徒の心と体の健康に寄り添う養護教諭の先生の意見などは、とても貴重な情報ソースであるため、認知能力のみならず、非認知能力についての視点でも話し合うことも大切です。





また、どのような指導が学力の伸びによい影響を与えているかを協議してその特徴（よさ）を明らかにし、それぞれの学級の実態に応じて、工夫しながらそれぞれの授業に取り入れていくことで、具体的な指導方法等の改善につなげられると考えられます。

活用例２：学級の学力の伸びの傾向から、指導の特徴（よさ）について協議する



さらに、自校において、教科のどの領域、どの観点において強みや課題が見られるかについては、「帳票０９」や「帳票２８」から、学年全体や学級ごとの状況を把握することができます。さらには、必要に応じて「帳票０１」から、児童生徒一人一人の採点結果を確認し、個別最適な学びにつなげることも大切です。

教員用リーフレット

参考資料：教員用リーフレット（再掲）



令和８年度 ふくしま学力調査
結果の返却・活用について

令和８年度調査から、パソコンやタブレットを使用した CBT で実施しています。

ひとり、ひとり、実現する ふくしま

福島県教育委員会

1　個人結果票の返却・活用の流れ

個人結果票は、児童生徒一人一人の「学力の伸び」や学習に関するアドバイスを、児童生徒や保護者、先生方にお知らせするものです。児童生徒一人一人の意欲を高め、学力を伸ばしていくことができるように、個人結果票の返却・活用の仕方についてポイントをまとめましたので御確認ください。

返却前

○ 各学校で保管している個人番号票をもとに、個人結果票に組、出席番号、名前を記入します。

※ この作業を間違えると、児童生徒に誤った結果が返却されることになります。間違いがないように十分に確認してください。

返却時

児童生徒には

令和８年度より解答ログ（解答にかけた時間）の結果が追加されました。

○ 本調査の特長を伝えます。

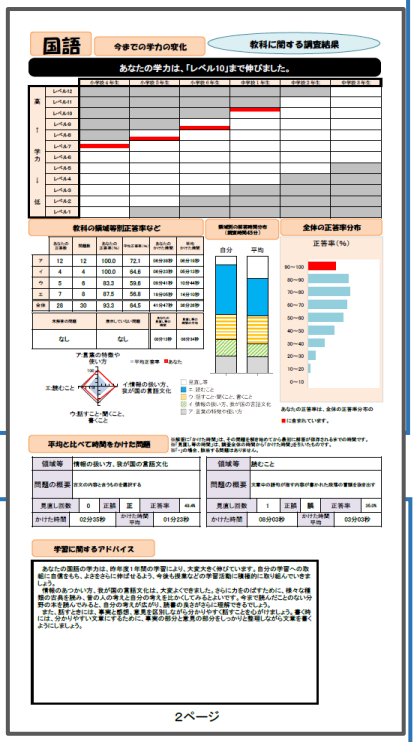
・ 一人一人の「現在の学力のレベル」や、「学力の伸び」が分かる調査です。

※ 小学校4年生は、次年度に「学力の伸び」が分かります。

・ 学力以外の力（根気がある、やるべきことをきちんとやる、自分に自信がある等）と、「学力の伸び」との関係が見え、学力を伸ばすための手がかりが分かる調査です。

○ 県の正答率や、他の児童生徒と比較することよりも、自分の学力がどれだけ伸びているのかを知ることが重要であることを伝えます。

○ 個人結果票の「学習に関するアドバイス」や「教科の領域別正答率」、「平均と比べて時間をかけた問題」などを活用し、正答率の高い領域をさらに伸ばしたり正答率の低い領域を克服したりするためのアドバイスをします。令和８年度からは、県平均と比べて時間のかかった領域や、時間のかかった問題の概要も記載されていますので、アドバイスの参考にしてください。



保護者には

○ 別紙「保護者用リーフレット」を配布し、本調査の特長や個人結果票の活用について保護者に伝えます。

○ 保護者会や三者面談、通知表の所見欄等を活用して、個人結果票から見える児童生徒のよさや課題を伝えます。

○ 「家庭学習スタンダード」を参考にし、「心の支え」、「環境づくり」、「習慣づくり」の視点から家庭学習の充実について保護者に伝えます。

2　個人結果票の見方と活用について

(1) ふくしま学力調査における学力の捉え方について

本調査ではすべての問題に難易度が設定されており、「どのくらい難しい問題に正答できるか」で学力を捉えています。そのため、年度の異なる調査であっても同じ尺度で学力を測定し、児童生徒の学力の伸びを経年で捉えることができます。

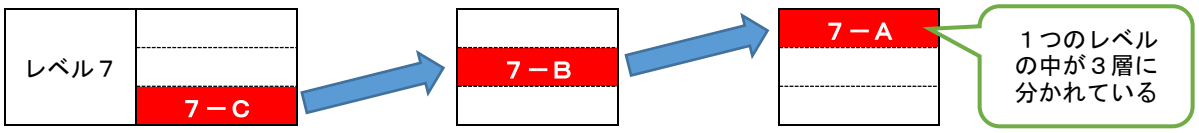
(2) 学力のレベルについて

学力のレベル表記はレベル１からレベル１１の１１段階ありますが、測定は各学年７段階で行います。

学年	学力のレベル
小学校４年生	レベル１～レベル７
小学校５年生	レベル２～レベル８
小学校６年生	レベル３～レベル９

学年	学力のレベル
中学校１年生	レベル４～レベル１０
中学校２年生	レベル５～レベル１１

１つのレベルは、それぞれ３層に分かれており、同じレベルの中でも、スモールステップで「学力の伸び」が分かります。例えば、同じレベル７の中でも、学力のレベルが高くなると赤いバーの位置が上方に変わります。前学年でのバーの位置と、今回のバーの位置を比べると、学力の変化が分かります。



※「A」「B」「C」の表記は個人結果票では用いられません（バーの位置のみです）が、学校用の結果帳票で用いられるため、説明の便宜上記載しました。

(3) 学習に関するアドバイスについて

学力調査の結果や学習習慣、領域別の今後の学習アドバイス等が記載されています。返却時や教育相談等の機会を捉え、児童生徒とつまずきや課題を共有しつつ、よいところを認め、児童生徒が学力を伸ばしていけるように働きかけてください。

3　調査結果の帳票の活用について

学校には、個人結果票とともに調査結果の帳票データが提供されます。これらの帳票により、児童生徒の学力のレベルや学力の伸び、学力以外の力等について把握したり、分析したりすることができます。特に御覧いただきたい帳票について紹介します。

帳票０９「教科に関する調査　問題ごとの正答率等一覧表」

各教科の領域ごとの正答率、設問ごとの正答率・無解答率や難易度について知ることができます。

帳票２８「各実施主体の調査結果票」

学年全体の学力レベルの変化や学力の伸びの状況等が教科ごとに、グラフの形でまとめられています。

帳票４０「学力分析データ（学力レベル・伸び・学習方略・非認知）児童生徒別」

一人一人の児童生徒の学力のレベル、学力の伸び、学習方略や非認知能力の変化等がわかります。

NEW **帳票４８「正答率・解答時間の県平均との比較」**　令和８年度より追加されました。

解答ログ（解答にかけた時間）のデータを領域・設問ごとに県平均と比較することができます。

帳票０９「教科に関する調査　問題ごとの正答率等一覧表」

○ 「教科の領域等」、「評価の観点」及び「問題形式」に分けて、学年毎、教科毎の正答率が確認できます。

○ 設問別の正答率を「問題の概要」や「出題の趣旨」と合わせて確認することにより、今後の教科指導における課題を明らかにできます。

令和6年度ふくしま学力調査（中学校2年生）

教科に関する調査　問題ごとの正答率等一覧表　［国語］

〇〇市立〇〇中学校

※ 数値は全てイメージです。

前年度調査からの学力の伸びが記載されています。一人一人の学力の伸びについては、帳票40をご覧ください。

集計結果

	学校数	児童生徒数	平均正答率	R7 中1 レベル（平均）	R8 中2 レベル（平均）	令和7年度からの同集団における学力の伸び（平均）
福島県	211	12,980	61.8	8−C	8−B	1
市町村教育委員会	12	1,234	61.9	8−C	8−B	1
貴校	1	87	62.2	7−A	8−B	2

分類・区分別集計結果

分類	区分	対象問題数(問)	平均正答率		
			福島県	市町村教育委員会	貴校
教科の領域等	言葉の特徴や使い方	12	60.7	61.2	61.4
	情報の扱い方、我が国の言語文化	5	77.2	79.9	76.2
	話すこと・聞くこと、書くこと	4	59.0	60.4	60.3
	読むこと	9	55.9	56.3	57.2
評価の観点	知識・技能	17	65.5	65.1	64.9
	思考・判断・表現	13	56.9	58.0	58.7
	主体的に学習に取り組む態度	−	−	−	−
問題形式	選択式	19	65.0	63.1	65.1
	短答式	10	56.6	55.3	56.8
	記述式	1	53.3	52.2	52.3

教科の領域等、評価の観点及び問題形式別の平均正答率をもとに、自校の教科指導における課題を明らかにし、授業改善に生かすことができます。

問題別集計結果

困難度レベルは、およそ70%の確率で正答する学力レベル（三分割）に対応しています。

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	学習指導要領の領域等				評価の観点			問題形式			福島県		市町村教育委員会		貴校		困難度レベル
			言葉の特徴や使い方	情報の扱い方、我が国の言語文	話すこと・聞くこと、書くこと	読むこと	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	選択式	短答式	記述式	正答率（%）	無解答率（%）	正答率（%）	無解答率（%）	正答率（%）	無解答率（%）	
1-1	漢字を読む（訓）	文脈に即して漢字を正しく読む	○				○				○		87.8	0.3	86.3	0.1	92.5	0.0	5−A
1-2	漢字を書く（音＋音）	文脈に即して漢字を正しく書く	○				○				○		52.9	10.6	56.1	9.8	64.8	4.1	9−C
																			6−B
																			9−C
																			11−A

※ 数値は全てイメージです。

問題は非公開（経年変化を調査するため）なので、正答率の低かった問題をやり直すことはできませんが、問題の概要や出題の趣旨を参考に、類似の問題に取り組ませたり、出題の趣旨に近い学習活動を充実させたりすることができます。

正答率を分析する際には、設問毎に設定された「困難度レベル」を参考にすることもできます。Ⅰ−C が最も易しく、Ⅱ−A が最も困難なレベルになります。

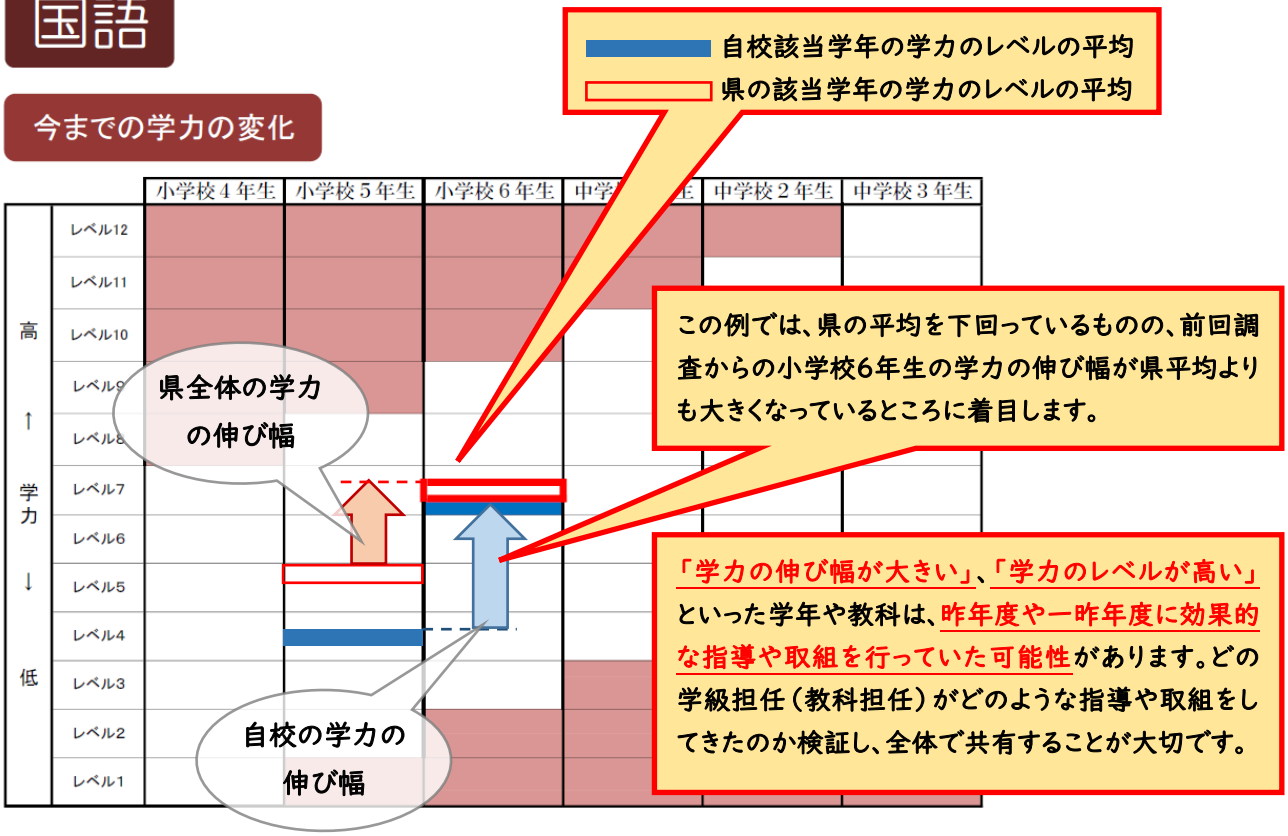
※ 設問ごとに難易度が異なるので、単純に「正答率が低い＝課題」とは言えないことに注意が必要です。

帳票２８「各実施主体の調査結果票」

○ 学年毎、教科毎の「学力のレベル」や「学力の伸び」の状況が確認できます。
○ 学力のレベルや学力の伸び幅をエビデンス（根拠）とし、昨年度の学級担任（教科担任）の効果的な指導や取組を検証して全体で共有することができます。
○ 「設問別正答率」、「教科の領域等別正答率」及び「県全体の正答率分布」から、県全体における相対的な位置を把握できます。

国語

今までの学力の変化



【昨年度の学級担任・教科担任】



自分の指導は、どのくらい子どもたちの学力を伸ばすことができたのだろう・・・。

【今年度の学級担任・教科担任】

昨年度とても頑張って学力を伸ばした子どもたちだと改めて分かった。もっと伸ばしてあげるために、どんなことができるだろう・・・。

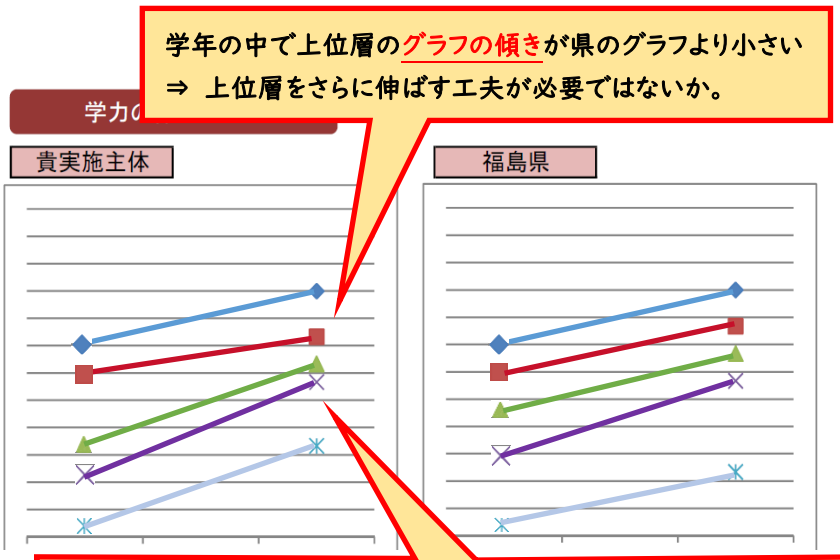


【管理職】



6年生の学力の伸びが大きいな。5年生のときに担任だった〇〇先生の取組を聞き取って、好事例を共有し、先生方全員のスキルアップにつなげよう。

様々な立場から、ふくしま学力調査の結果データを分析することで、児童生徒の様々な姿が見えてきます。特に「成果（強み）」を見つけることを大切にし、その要因を組織の「強み」として大切にしましょう。



学年の中で上位層のグラフの傾きが県のグラフより小さい
⇒ 上位層をさらに伸ばす工夫が必要ではないか。

学年の中で中位層から下位層のグラフの傾きが県のグラフより大きい
⇒ 中位層・下位層への効果的な指導や取組があったのではないか。

下位層に対して丁寧に支援した成果があったみたい。上位層の幅が広くなってしまったようだけど、一人一人の状況はどうなっているだろう。帳票40で確認してみよう。



【昨年度の学級担任・教科担任】

教科部会や校内研修などでの活用例

○ 「学力の伸び」という共通の視点があるので、学級担任や教科担任だけでなく、様々な立場から話すことができます。
○ 学力を大きく伸ばした先生、上位層を伸ばすのが得意な先生、下位層を伸ばすのが得意な先生などの取組事例を共有し、効果的な指導や取組を検証し、共通実践につなげることができます。
※ 若手教員もベテラン教員も互いの意見を尊重し、学び合うことが大切です。
※ 気になる児童生徒の実態把握には、学習方略や非認知能力のスコアも参考にすることが大切です。



児童生徒の学力向上のために、授業改善が大切なことはもちろんですが、生徒指導や学級経営など、様々なことが関わっています。教員それぞれが持つ知見や児童生徒の見立て等を共有することで、学力向上につながる直接的、間接的方策が見えてきます。学級担任、教科担任が一人で抱え込むのではなく、管理職のリーダーシップの下、学校の組織力を最大化し、チームとして対応することが大切です。

帳票４０「学力分析データ（学力レベル・伸び・学習方略・非認知）児童生徒別」

○ 学級内の児童生徒別に、「学力のレベル」や「学力の伸び」の状況が確認できます。
○ 「学習方略」や「非認知能力」に関する質問紙調査の結果及び経年変化について確認できます。

一人一人の児童生徒の学力について、前年度と今年度の比較による経年変化（学力の伸び）がわかります。

国語			算数・数学		
R8レベル	昨年度からの学力の伸び	R7レベル	R8レベル	昨年度からの学力の伸び	R7レベル
9-A	5	8-C	8-A	1	8-B
9-B	6	7-B	9-A	5	8-C
8-C	3	7-C	8-B	4	7-C
9-C	1	8-A	9-B	3	8-B
8-A	4	7-B	7-A	5	6-C
9-C	1	8-A	8-A	3	7-A

本帳票の「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方略」「非認知能力」の数値の範囲は、1.0～5.0 で、変化量はR7調査とR8調査の差になっています。

※ 数値は全てイメージです。

R8→R7（変化量）

主体的・対話的で深い学びの実施	学習方略						非認知能力	
	柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略		自己効力感	自社会性
0.0	1.8	1.5	2.3	1.3	1.0		0.5	0.2
0.2	0.3	1.7	0.5	0.5	1.0		0.5	0.4
1.1	1.0	0.8	0.3	1.3	0.5		0.1	0.9
0.3	0.3	0.5	0.5	0.0	1.0		0.9	0.3
0.7	0.3	0.5	0.3	0.3	1.3		0.2	0.5

一人一人の児童生徒の学習方略や非認知能力について、前年度調査と今年度調査の経年変化（どの項目がどのように変化したか）がわかります。

※ 学習方略や非認知能力のスコアは、個人内比較に用います。単年度のスコアで、気になる児童生徒の特性や状態を把握することもできます。
※ 成長に伴い、自分に対して厳しく評価するようになる児童生徒もいます。スコアの上下だけで判断せず、複数の教員による日常の見取りと合わせて成長を見ることが大切です。

学習方略 ～ 児童生徒が学習効果を高めるために意図的に行う活動

柔軟的方略：自分の状況に合わせて学習方法を柔軟に変更していく活動
プランニング方略：計画的に学習に取り組む活動
作業方略：ノートに書く、声に出すといった「作業」を中心に学習を進める活動
認知的方略：より自分の理解度を深めるような学習活動
努力調整方略：「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動

個票の返却 ～ 帳票４０をエビデンス（根拠）にした指導

特に以下のような傾向がある児童生徒に対して…

○ 学力が平均には届かないが伸びが見られる
○ 学力が平均を超えているが伸びが見られない
○ 学力が下がっている

学級担任としてどのような声かけ（指導）をすればよいか、面談前に学年会等で相談しておきましょう。その際、帳票40の「学習方略」や「非認知能力」の数値が参考になります。具体的なエビデンス（根拠）に基づく指導で、一人一人の児童生徒の学力向上を実現させましょう。

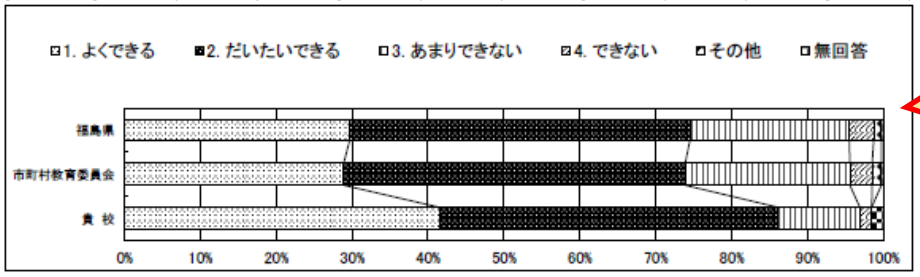


帳票 10 「児童生徒質問調査_集計データ（グラフあり）」

○ 児童生徒質問調査は、学校の「授業に関すること」「学習意欲や学習環境に関すること」「家庭での生活に関すること」などの状況を県の平均値と比較しながら確認できます。
○ 同じ質問の集計結果を経年で比較することで、経年変化を確認できます。
○ 学校の課題等に合わせた質問項目を指標として設定することで、学校の取組を客観的に評価することができます。

質問番号	質問事項									
（41）	先生の話や友達の発表をしっかり聞き，自分の考えを伝えることができていますか									
選択肢	1. よくできる　2. だいたいできる　3. あまりできない　4. できない									
	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	無回答
福島県	29.7	44.9	21.0	3.2						
市町村教育委員会	28.9	45.0	21.7	3.0						
貴 校	41.5	44.6	10.8	1.5						

※ 数値は全てイメージです。



児童生徒の学習状況や生活状況とともに、学校や学年の強みや課題を把握することができます。また、学校の取組を評価する指標として活用することもできます。

帳票 42 「学力分析データ（前年度在籍学年・クラスを基準にした伸び等）」

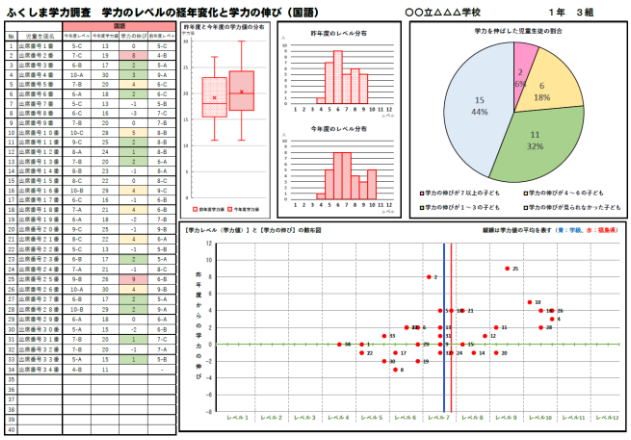
○ 前年度の在籍学年・クラスを基準に並べ替え、「学力の伸びの平均」や「学力を伸ばした児童生徒の割合」を確認できます。
○ 学力を伸ばした学級の先生に聞き取りをすることで、効果的な取組を共有することができます。

前年度の在籍学年・クラスからの「学力の伸びの平均」と「学力を伸ばした児童生徒の割合」がわかります。

※ 数値は全てイメージです。

学校名	R8学年	R8組	R8児童生徒数		学力を伸ばした児童生徒の割合（%）		学力の伸び率（R8学力レベルとR7学力レベルの差の平均）		R8学力レベル平均		R7学力レベル平均	
					国語	算数	国語	算数	国語	算数	国語	算数
				福島県平均	77.5	76.2	2.6	2.6	20.1	18.1	17.5	15.6
○○市立○○小学校	5	1	34		76.1	78.3	2.6	3.2	21.4	19.0	18.8	15.8
○○市立○○小学校	5	2	33		70.2	80.1	1.9	2.2	20.7	18.5	18.8	16.3

グラフ化ツール　～　学力レベルと学力の伸びを視覚化



○ グラフ化ツールは、帳票 40 の学力レベルと学力の伸びのデータを視覚化するツールです。
○ グラフ化することで、教科ごとの学力レベルと学力の伸びの状況を視覚的に捉えることができます。
○ 学級集団の学力の経年変化の状況を示した箱ひげ図も掲載しています。

※ グラフ化ツールは、県教育委員会より別途送付します。

NEW

帳票 48 「正答率・解答時間の県平均との比較（教科ごと）」

○ 解答ログ（設問ごとにかけた時間の記録）をもとに、問題ごとの正答率と解答時間を、県の平均と比較して確認することができます。
○ 解答時間を基にした分析をすることで既習内容の定着の状況等を確認することができます。

領域別の平均正答率（県、市町村、学校）
領域別の平均解答時間（県、学校）

問題ごとの自校の正答率と解答時間が、県と比較してどうかを、4象限で表示（縦軸；正答率の差、横軸：解答時間の差）



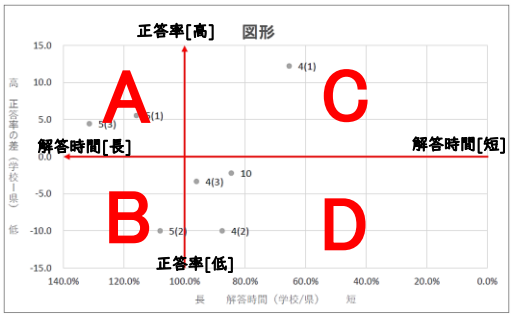
問題ごとに正答率と解答時間を、県、市町村、学校を比較した表及びグラフ

※問題が非公開となっているため、「出題の趣旨」を掲載（趣旨だけではイメージしづらい場合には、帳票 09 の「問題の概要」も参照）

帳票 48 の「4 象限」を活用した授業改善例

A：解答時間[長]×正答率[高]
既習事項を振り返る際に、児童生徒の思考を整理することを心がける。繰り返し振り返る機会を設けて、できたことを称賛しながら定着を図る。

B：解答時間[長]×正答率[低]
既習事項を丁寧に振り返る。どこでつまずいているかを明らかにし、できていることを称賛しながら、基礎・基本の定着を図る。



C：解答時間[短]×正答率[高]
既習事項の復習に当てる時間を精選し、新たな学習内容や発展的な学習課題に挑戦する時間を確保する。

D：解答時間[短]×正答率[低]
粘り強く取り組む重要性を実感させる。既習事項とのつながりを実感させながら学習を進めたり、繰り返し振り返る機会を設けたりすることで、できたことを称賛し、自己効力感を高め、定着を図る

※児童生徒の実態によって、授業改善の方法は異なります。検討する一つの材料としてください。